

いしづち

2026.11

NOVEMBER

No.173



公益社団法人 愛媛県建築士会

Ehime Society of Architects & Building Engineers

<http://www.ehime-shikai.com>

ディスカール
自分磨きへの道しるべ 建築業を生業にすることに思うこと
大正時代の道後温泉本館・周辺温泉施設の設計者



- 1 ディスクール 道上壯/V u A……①
- 2 自分磨きへの道しるべ 建築業を生業にすることに思うこと 松山支部 尾崎 光高……③
- 3 大正時代の道後温泉本館・周辺温泉施設の設計者
愛媛大学客員研究員 一級建築士 一級建築基準適合判定資格者 野本 健……⑤
愛媛大学大学院工学研究科 准教授 博士(工学) 多田 豊……⑤
- 4 委員会報告 登録有形文化財 一柳陣屋門 文化財・まちづくり委員会 委員 合田 純……⑧
令和8年一級建築士試験「設計製図の試験」対策『ホテル』実例見学会報告
青年委員会 委員長 大内 雄志……⑨
第35回全国女性建築士連絡協議会(東京)参加報告
女性委員会 副委員長 八束智恵美……⑩
女性委員会 委員 大塚美由紀……⑩
- 5 支部報告
木のジャングルジム「くむんだー」＆木組みのおはなし会
今治支部 青年委員長 今井このみ……⑪
建築士の日の事業「模型家づくり体験」 松山支部 青年・女性委員会 片岡 晶子……⑫
八幡浜支部活動報告(令和8年度) 八幡浜支部 支部長 藤川 広治……⑬
建築士の日の行事報告「明石寺建物見学と史跡・大寶寺道探索」
西予支部 支部長 松山 清／報告 渡辺 建文……⑭

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。

透明水彩・紙

題：興居島の天体「碧と光の記憶」
紙サイズ/F4

この作品は、興居島という瀬戸内海に浮かぶ特定の場所の気配を、極めて抽象的でありながら情緒的に捉えた、瞑想的な一枚です。画面中央に浮かぶそのフォルムは、単なる天体としての図像を超え、島そのものの記憶や、島を囲む海と空のドラマを内包しています。

興居島は松山市沖の瀬戸内海に位置し、古代の伊予皇子伝承や「母居島」を語源とする歴史ある島です。中世には伊予水軍の拠点となり、出陣・凱旋の様子を伝える伝統芸能「船踊り」や約250年の歴史を持つ「島四国八十八ヶ所」の文化が生まれました。江戸時代末期から桃やビワなどの果樹栽培が始まり、昭和中期以降は高品質な「興居島みかん」のブランドを確立。海運の要衝から温暖な気候を生かした果物の島へと発展しました。

表紙作者 上田 勇一 プロフィール

1974 東京生まれ
1980 小学校から高校まで松山在住
1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞
1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞
(愛媛県建築士事務所協会主催)
1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ
1996 日本工業大学建築学科 卒業
1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催
2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」
(新潮社)の装丁担当
2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞(東京/日動画廊)
2010 愛媛県美術館に作品「ドライフラワー」收藏される
2015~17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載
絵画教室やオリジナルブランド額工房「髯リチエルカ」を設立
2017 「えひめの塗り絵」を出版
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。
現在、現代日本美術会 会員／審査員



ディスコール(discours)とは、フランス語で言語・文化・社会を論じる際に使われる言葉で「書かれたこと」や「言われたこと」を意味する。簡単に言えば「言説」のことだ。僕が建築のことを知り始めてから、幾つかのディスコールに出会ってきた。その中でも印象に残っているものを紹介してみたい。

『すべては建築である』オーストリアの建築家ハンス・ホラインが1968年に雑誌上で宣言した言葉だ。丘の上に佇む空母の写真の下に、キャプションとして書かれていた。知ったのは1985年頃で、当時学生だった僕は「何でも建築になりうるんだ」ぐらいの解釈しかできなかった。

コルビュジェが65年に没し、ミースが69年に没し、時代は近代の終焉とポストモダンの夜明けを孕んでいた。この言葉を追い風に、ポストモダンは猛威を振るってゆくわけだが、ホラインの真意はもっと別のところにあった。物理的な実体に依存しない建築のあり方、つまり、今の時代のバーチャルな空間をも含めた、建築概念の拡張を示唆していたのだ。

『ポストモダンとは、川の淀みのようなもの』建築家の丹下健三が1987年頃に雑誌に発表したコラムだ。ポストモダンは、モダニズムという本流の傍に、ぐるぐると渦を巻いて淀んでいる出口のない流れで、いずれは本流へと戻ってくるものだと言った。当時、ポストモダンを建築の手掛かりとしていた若手建築家たちは、こぞって反旗の声を上げた。僕も、時代の新しい風潮を理解できない大御所が、若手を妬んでの言葉だと解釈していた。

1991年に竣工した東京都庁がポストモダンだと揶揄されつつも、丹下は、都市と建築の新しい表現だと批判をかわした。しかし、ゴシック建築の大聖堂の双塔やコンピューターチップのグリッドパターンのメタファーは、誰がみても明らかなポストモダンだった。バブル崩壊と共にポストモダンは終焉を迎え、都庁は丹下の新しい建築への葛藤と自己矛盾の遺構として聳え立つこととなった。

『21世紀のドミノ』建築家の伊東豊雄が1989年頃に雑誌のインタビュー記事で発した言葉だ。コルビュジェは、20世紀にドミノシステムを考えて、現代建築に貢献してくれた。21世紀を生きる僕たちは、21世紀のドミノシステムを考えて、建築に貢献しなければならないというものだ。

21世紀のドミノってどんなものだろう？学生の頃からずっと気になっていたが、2001年1月、21世紀の幕開けと共に開館した「せんだいメディアテーク」を目の当たりにして、僕は伊東の偉大さを痛感した。1941年生まれ伊東は60歳の還暦にして、20世紀を超えるドミノを考え出し、21世紀の建築の礎を築いたのだ。建築が確実に変わった。13本のチューブが、地上7層の空間を軽々と宙に浮かせていたのだ。

『プログラム』スイスの建築家ベルナール・チュミが1989年にラ・ヴィレット公園の発表の際、『フォリー（装飾用の建物）』というキーワードと合わせて使ったものだ。プログラムというと僕たちは、運動会のプログラムや音楽発表会のプログラムを思い浮かべるが、チュミが意味したのは、「形態」と「機能・用途・空間」のあり方を切り離し、新たな関係性と可能性を生み出す概念として語ったものだ。

チュミが『プログラム』という言葉を使って以降、この言葉は建築用語として定着してゆくことになる。チュミの概念とは少し違った形ではあるのだが、建築の機能、用途、目的、条件、使われ方などを意味する言葉になった。現在、実務でも学生の卒業制作でも「この建築のプログラム（目指すところ）は何？」などと、当たり前のように使われている。

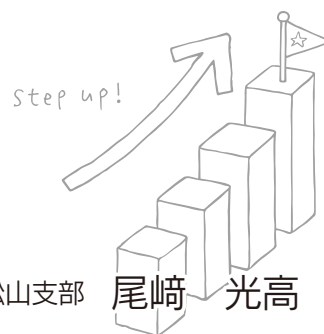
『アンビルドアーキテクト』実際の建築はつくらないが、コンセプトや図面や模型で革新的なアイデアを表明する人たちのことだ。僕が学生の頃、デビューしたてのザハ・ハディドがアンビルドの女王として有名だった。その斬新さゆえに、実現不可能のレットテルを貼られ、アイデアの面白さだけを評価される不遇な時期を、僕は覚えている。

僕が社会人になった頃、ザハは次々と建築を実現させていて、もう既にアンビルドではなくなっていた。そしてその頃、a+uの特集でレベウス・ウッツを知り、そのドローイングの格好良さと、イデオロギーの強靱さに驚いた。ウッツの建築には「近未来」「都市」「戦争」「兵器」「混沌」という言葉が付きまとう。未完の建築を通してウッツが伝えたいものが、本能的に感覚的に僕に突き刺さってきたことを覚えている。

ディスクールは、その時に感じたことや考えたことが、時代と共に、又、自分が齢を重ねることで変わってきたりもする。それが、時代というフィルターを通して解釈していたせいなのか、自分が成長もしくは退化したせいなのか、再考してみる必要がある。そして、そこで気がついたことを、次の建築の糧にするといいだろう。

僕らの世代は、若かりし頃の大半をバブル崩壊、失われた10年、失われた30年と過ごしてきた。実際の建築をつくることよりも、建築をイデオロギー的に考えることの方が多く長かった。中には、建築から離れてゆく者もいた。そんな荒波の時代を航海したせいのか、このコラムが書けるほどの思考的な鍛錬が、蓄積されたわけでもある。不遇な時代が、跳躍への屈伸に役立っているとも考えることもできる。

遠い時代の古臭いディスクールだが、みなさんの建築のこれからに少しでも役立てれば、幸いである。

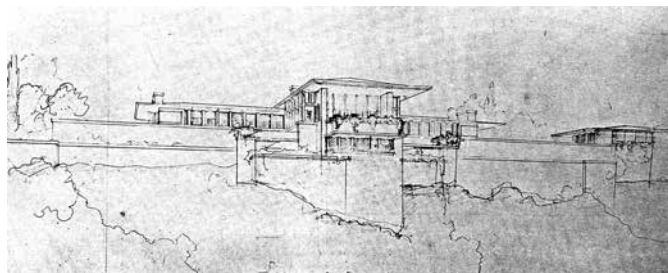


松山支部 尾崎 光高

建築業を生業にすることに思うこと

最終回のテーマは、すでに建築分野で働いている方、これから建築分野を目指している方にお伝えしたい事を自分なりに挙げてみたいと思います。

私は小学生の頃には漫画を描いたり、飛行機の模型を作ったりしており手先が比較的器用でした。農家の次男坊であったこともあり、手に職を付けないといけないと両親から言われ続けていました。最初から建築を目指していた訳でなく、中3の頃、高校受験に失敗すれば大阪で建築業をしている叔父の所で大工になろうと漠然と考えていました。幸いにも合格となり工業高校に入学出来ました。松工時代にはセンスに拘られる等、素晴らしい恩師の方々に出会い一時教員生活もしておりましたが様々な建築家の作品集とかに感化され設計の道に至りました。



▲F・L・ライト自筆パース

F・L・ライト、P・ルドルフ他の建築家が描いたパースに惹かれて、又、当時はパースを描ける設計士が少なかった為、自分の特技として身に付けて差別化を図れるようになればと漠然と思い建築パースの勉強を始めた経緯があります。今までもお伝えしましたが、人と同じことをしては中々良い結果に繋がりにくいと思います。

ここで、建築業に於いて特に会得して頂きたい項目を挙げてまいります。主に設計業務についてです。

1) 平面プラン造りは私はパズルのように感じられます。各部屋をいかに使いやすい動線等でまとめていくか、組み合わせるだけでなくコンセプトがしっかりしているかが大事です。(住宅の場合は施主の意向が反映されているか、建てたいと思わせる魅力が溢れているか、設計士としてのセールスポイントが明確であるか等) (店舗の場合はその業種にあったセンス溢れる客を引き付けられる斬新なデザインか、居心地の良い空間造りか、飽きの来ないアイデア満載か、話題性があるかなどが考えられます) (公共建築の場合はそれぞれの目的に合った憩いの場であるか、機能はもとより優れたデザインであるか、親しみのある空間となっているか等) (マンションは採算が取れるか現代にあった間取りか、人気が出る要素があるか、空室が出来にくいかが挙げられます) 全てのジャンルをこなせるスキルを身に付けるのは中々難しいですが、未経験案件が発生した時は是非チャレンジして経験値を養い引き出しを増やして頂くと思います。

2) 外観・室内デザインはどういうイメージ・コンセプトで提案するかも難しい問題です。まずは創造力が大事だと感じます。何を表現したいのか、大きく予算が外れない工夫も必要です。プロポーション、スケール感、配色(色彩)、バランス等まとめていくのが大変ですが非常に楽しみです。自分の作品を生み出す努力は半端ではないですが腕の見せ所でもあります。和風、洋風、モダン、クラシック、ヨーロッパ風、アメリカ風、北欧風、アジア風等様々な様式を勉強していく必要があります。(又、構造様式の把握も欠かせません) これらはインテリアについても、内装、家具、照明、カーテン等様々な様式(色彩)を理解していないとコーディネイト出来ません。そしてエクステリア部門も同様です。昔は設計士が全部決めていましたが、今はIC(インテリアコーディネーター)、EP(エクステリアプランナー)が分業化され活躍されています。それぞれの方も、日々の研鑽の積み重ねが重要です。総合的にバランスの取れた建築物を生み出す為に不可欠です。



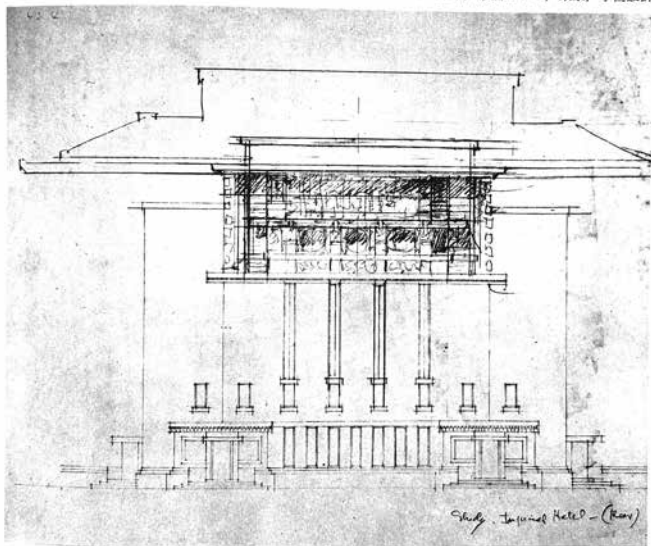
▲F・L・ライト自筆 外観エスキース

3) スペシャリストという選択肢もあります。建築分野は多岐にわたる為、全てを把握して対応するのが大変でもあり、自分の向き不向きもあります。不得意分野を一生懸命に克服するのも良いのですが、時間、能力の関係も考えていくと、自分の感性に合ったスタイルを見つけその分野(住宅、店舗、クリニック等、木造、S造、RC造等)では誰にも負けないといったスペシャリストを目指すのもありかと思います。又、今般は大きく新築部門、リフォーム部門に分かれています。新築棟数が落ち込む中リフォーム部門も重要になってきていますね。私は昔から新築、リフォームとも業務してきましたが、木造も新耐震基準が改訂され古い物件の増築をする場合、建確申請が必要となればかなり難しくなっています。建確済証はもちろん検査済証がないと建確申請不可となることもあります。そうなれば、建確申請が不要の範囲でまとめていくことになります。最近、古いRC造のリフォー

ムの相談等も増えていますが、これも新耐震基準の絡みで建確申請が伴う場合は不可となることが多いです。時には解体すべきとの助言をすることもあります。ここで、安全性、残す意味等、適格に判断して相談者に伝えることも設計士としての役目かと感じております。逆に、新しい基準に準じて古い建物の寿命を伸ばしていく業務も大事になってくるかと思えます。どうやって再生するかも腕の見せ所ですかね。リフォームの匠を目指すのも一計かと思えます。只、各構造を理解していないと的確な補強が行えない為、パース作成と同様に構造の勉強が必修となります。結構、人命に関わりますので責任重大です。

4) 法律が分からなければ設計出来ない。建築物を建てる場合には建築基準法、建設業法、消防法、省エネ法、医療法、民法、空港法、河川法、農地法等が必要です。建物の主用途、規模等により違ってきますね。ここを理解しておかないと建築確認や各種許可が下りません。プラン作成の段階から各法律書とにらめっこしながらの作業となります。必ず、計画物件に掛かってくる条文を事前に把握してからでないと抵触する部分があれば練り直しとなります。自分の素晴らしい案も実現することが出来ません。私はあやふやな所が有る場合は、必ず官公庁・検査機関に事前相談に行き教えて頂くようにしています。これをせず、大丈夫だろうと建確申請してから心臓が止まる思いを何度も経験して来ました。これだけは皆さんきちんと対応して下さい。そして、同じ法律であっても各々の機関によって解釈が異なることがあります。よって、県内外に関わらずその建設地の各機関に出向き事前相談・確認をしなければなりません。どこでも親切に教えて頂けますので是非お願い致します。法律に乗っ取った安全性、耐久性の高い作品を提供していくことも大事な社会的義務だと思います。

1915~22年、帝国ホテル、東京、予備設計



▲ F・L・ライト自筆 外観エスキース

5) ICの方にはインテリア全般に於いてかなりの情報量となりますが、目指されている方は様式研究、色彩感覚、統一感、逆に意外性等学ばれると良いかと思えます。こだわりの強い施主の場合、インテリアに重きを置いている方が多いように感じています。時に斬新なアイデアによる提案力も必要であり、差別化を図る要素となります。絵画、ファッション等にも興味を持って頂くと良いかと思えます。EPの方は、主役の建物にマッチした提案を心がけて頂ければと思います。そして、色彩感覚も大事になります。建築だけでなくあらゆるデザイン分野からもヒントが見出せると思いますので情報収集に努めて下さい。主役が生きるかどうかのカギとなるかと思えます。

6) 最後に、各クライアントの夢の実現を担っている訳ですので、皆さんも大いに夢を見て下さい。自由な発想からすぐれた作品が生み出されると考えております。いくら考えても費用は掛かりません。有名な建築家で無くても、一つでも自分なりの拘りが詰まっていればその建築物は唯一無二の存在となり何十年も生き続けていきます。たまに建築家と設計士の違いは何だろうと考えることがありますが、まだ答えは見つかっていません。あまり気にしなくてもよいのかもしれませんが、のしかかってくる社会的責任は同じように思います。又、時には人と比べて卑屈になることが今でもありますが、自分を信じて進んで行くしかないかと思う次第です。今般、様々な分野でAIが進化していますが人間が支配されないように注意しないといけないと感じています。何十年後には、AIによって人類が滅亡するという警鐘を鳴らす記事までありますね。あくまでもさじ加減は人間が行うべきと考えます。ということで、AIの扱いには注意しながら活用していくべきだと思います。人間が必要とする建物ですから人間味が感じられる作品を提供していく責任があると思います。皆さんの今後のご活躍を願っております。



◀ 素敵な絵画風パース

写真のようなCGもよし、味わい深い手描きもよし。

大正時代の道後温泉本館・ 周辺温泉施設の設計者

執筆：愛媛大学客員研究員 一級建築士 一級建築基準適合判定資格者 野本 健
監修：愛媛大学大学院工学研究科 准教授、博士(工学) 多田 豊



▲ 現在の本館

■はじめに

道後温泉は『伊予国風土記』にも記述がある、日本最古といわれる温泉地です。なお本稿では、温泉地としての「道後温泉」と、建築物としての「本館」を区別して表記します。現在の本館は明治27年（1894）に改築されたもので、平成6年（1994）には国の重要文化財に指定されました。

これまでの建築史研究は、明治期の本館、神の湯本館や又新殿・霊の湯棟に集中してきました。その一方で、大正期に本館のまわりに建てられた温泉施設や、その後の改築の過程については、ほとんど分かっていない「空白」の状態が続いています。『いしづちNo.170』で大正期における本館および周辺温泉施設の変遷を整理しました。今回はその続きとして、大正期の本館・周辺温泉施設の建築に関わった設計者を特定し、その略歴と、手がけた建築物をご紹介します。



▲ 大正期の本館



▲ 西湯



▲ 鷺の湯

大正時代の道後温泉本館・周辺温泉施設の設計者

■大正期の道後温泉 本館のまわりにあったもの

設計者の話に入る前に、当時の道後温泉がどんな場所だったかをご紹介します。大正期の本館の周囲には性格の異なる浴場がいくつも点在していました。本館の神の湯・霊の湯に加えて、牛馬のための浴場とされる「牛馬湯」、中等湯の「西湯」、普通湯の「砂湯」、そして「鷺の湯」や「道後公会堂」です。いまの道後温泉からは想像しにくいかもしれませんが、湯之町にはこれだけの公衆浴場があったのです。

これらの施設は、大正期に進められた本館の増築計画の中で整備されてきました。整理した四期の計画と、実際の整備状況は次のとおりです。計画どおりに進んだのは第一期だけで、あとはいずれも変更されている点が目を引きます。



▲砂湯



▲道後公会堂（各写真提供：二神 将）

第一期工事 大正11年(1922)（計画どおり）

中等湯の浴場「西湯」と、普通湯の浴場「砂湯」を建設。

第二期工事 大正13年(1924)（計画変更）

「養生湯」を改築。ただし、計画されていたポンプアップによる増湯は行われず。

第三期工事 昭和2年(1927)（計画変更）

「鷺の湯」を建設。高等湯とならず。

第四期工事 昭和2年(1927)（計画変更）

「道後公会堂」を建設。ただし浴場は設けられず、集会場のみに。

■平源右衛門

新聞記事を一つずつ確認していくと、大正13年(1924)の『海南新聞』に「道後養生湯改築……技師は平源右衛門」という記述が見つかりました。養生湯棟の改築工事に、平源右衛門が技師として関わっていたことが確認できます。

もう一人、忘れてはならない人物がいます。平の娘と結婚した伊賀上五郎です。伊賀上は記念誌のなかで「養生湯改築工事に従事しました。所長は平源右衛門(義父)。日本建築の棟梁 富永常吉老人の指導で、現在の養生湯および正面玄関唐破風の製図を一手に引き受けました」と語っています。

ご子孫への聞き取りからも、これを裏づける証言が得られました。2021年6月には、平のご子孫である高橋共和氏から「平源右衛門が本館の設計に関与していたと、平の息子・昭男から聞いた」との証言を、2024年11月には、伊賀上の息子である伊賀上博志氏から「平源右衛門とともに玄関棟・養生湯棟の設計を担当したと父から聞いた」との証言をいただきました。

大正時代の道後温泉本館・周辺温泉施設の設計者

■平源右衛門の略歴

平源右衛門は明治14年（1881）、鹿児島県出水郡出水町上鯖淵（現・出水市）に生まれました。その歩みは、大きく四つの時期に分けて見ると分かりやすくなります。福岡工業学校の建築科を卒業したあと大蔵省に入り、大正2年（31歳）に愛媛県土木課へ移ります。

日本赤十字社愛媛支部を経て、大正8年（37歳）に道後湯之町の建築技師となりました。注目したいのは、平が道後湯之町の技師をつとめた時期です。大正8年から昭和2年までのおよそ10年間に、本館の玄関棟・養生湯棟に加えて、西湯・砂湯・鷺の湯・道後公会堂といった周辺温泉施設、さらに町内の湯築尋常高等小学校（現・道後小学校）まで手がけています。

活動の場は道後だけではなくありませんでした。松山市内でも、新栄座、日本赤十字病院（現・松山赤十字病院）、松山カフェーなどに関わっています。そして昭和7年（51歳）には、松山市内では戦前唯一とされる建築設計事務所を構えました。

年	年齢	できごと
修学期——鹿児島に生まれ、建築を学ぶ		
明治14年 (1881)	0歳	鹿児島県出水郡出水町上鯖淵に生まれる
明治37年 (1904)	22歳	福岡県福岡工業学校 建築科を卒業し、大蔵省専売局へ
明治39年 (1906)	24歳	大蔵省臨時建築部
愛媛県時代——県の技術者として		
大正2年 (1913)	31歳	愛媛県土木課 ①新栄座の建設に携わる
大正5年 (1916)	34歳	日本赤十字社愛媛支部 ②日本赤十字病院の建設に携わる
道後湯之町時代——温泉街をつくる		
大正8年 (1919)	37歳	道後湯之町建築技師となる
大正11年 (1922)	40歳	③西湯・④砂湯の建設に携わる ⑤松山カフェーの建設に携わる
大正13年 (1924)	42歳	⑥養生湯棟（現・南棟） ⑦玄関棟の建設に携わる
大正14年 (1925)	43歳	⑧湯築尋常高等小学校の建設に携わる
設計事務所時代——松山で独立する		
大正15年 (1926)	45歳	松山市で平建築事務所を共同主宰する
昭和2年 (1927)	46歳	⑨鷺の湯・⑩道後公会堂の建設に携わる
昭和7年 (1932)	51歳	⑪平建築事務所を設立する
昭和13年 (1938)	57歳	逝去



▲平源右衛門（写真提供・高橋共和）



▲左：松山市の地図 右：道後湯之町の地図
（提供：国際日本文化研究センター）

■まとめ

大正期の本館および周辺温泉施設の設計を、平源右衛門が担当した可能性が高いこと、現在まで続く道後温泉の景観形成に重要な役割を果たした人物であったこと、平の出生から学歴・職歴、関わった建築物までを、一覧として整理することができました。

一方で、平がどのような考えで設計に向き合っていたのかは、まだ分かっていません。今後は当時の写真や図面をもとに、平源右衛門の設計上の特徴と設計思想に迫ります。

私たちが毎日のように目にしている道後温泉の風景は、決して自然にできあがったものではありません。その背後にいた技術者の像を描き出すことが、これからの課題です。

今回の研究内容は2026年度日本建築学会大会（中国）にて『道後温泉本館・周辺温泉施設の設計者：道後温泉の建築史研究（2）』として発表しています。道後温泉本館の保存修理工事やその歴史については、『道後温泉本館保存修理工事 総集編』、『道後温泉湯釜ものがたり』に詳述していますので、ご興味のある方はぜひ一読いただければ幸いです。

*本書掲載の文章・図版の無断複製・転載を禁じます。

登録有形文化財 一柳陣屋門

文化財・まちづくり委員会 委員 合田 純

はじめに

JR川之江駅から北に1本入ると、土佐藩の参勤交代の道だったと伝わる土佐北街道があります。その街道筋に川之江八幡宮があり、その境内地に一柳陣屋門がひっそりと建っています。城の再建に思いを馳せつつ病に散った一柳直家公の「兵どもが夢のあと」を偲ぶことのできる唯一の建物として、ご紹介いたします。

陣屋と城、陣屋門について

陣屋とは、城を持たない小さな大名や、幕府の代官が執政を行った小さな拠点のことです。石垣や天守を備えた城とは異なり役所と館を兼ねた簡素なつくりで、陣屋門はその「顔」にあたります。

川之江にはもともと川之江城（仏殿城）があり、中世以来様々な大名が隣接する讃岐方面へ睨みを利かせていたようですが、河上但馬守が城主のころ、四国中央市上分町と金田町にまたがる轟城の城主、大西備中守に討たれたと伝わります。その後一柳直家が寛永14年（1637年）に川之江に入ったところには城はなく、川之江藩の拠点は城下の陣屋となったのです。

一柳氏と川之江藩

一柳直家は川之江に2万3,600石、播磨5千石を所領していましたが、寛永19年（1642年）に急死、川之江藩はわずか6年ほどで潰えることとなったのです。

門の様式

ここで社寺建築の大工である私が思いつく範囲で、わが国に伝わる伝統的な門の種類で代表的なものを紹介します。（ご興味のある方は検索してみてください）

- ・冠木門かぶきもん 関所などで用いられた簡素な門←妻籠宿本陣冠木門：長野
- ・四脚門しきやくもん 通用のみの用途に用いられる切妻の門←豊満神社四脚門：滋賀
- ・八脚門はっしやくもん 中央一間が通用、両脇間一間ずつに金剛力士や随神が安置される門←出雲大社八脚門：島根
- ・薬医門やくいもん 医者や大名屋敷によく用いられる（矢喰門とも）：随心院薬医門：京都
- ・楼門ろうもん 両脇間に金剛力士を配し、上層に縁をめぐらせた門。多くは入母屋屋根だが切妻も←八坂神社西楼門：京都
- ・二重門にじゅうもん 2階建ての門で2階には釈迦三尊や観音菩薩の像が祀られる、非常に重要な門。←東福寺三門：京都

- ・高麗門こうらいもん 門扉の回転による力学的な欠点を特異な様式で解消している。←本願寺総門：京都
- ・平唐門ひらからもん 屋根が唐破風で、平入り。←醍醐寺三宝院唐門：京都
- ・向唐門むこうからもん 屋根が唐破風で、妻入り。←西本願寺唐門（別名ひぐらしの門）：京都

一柳陣屋門の建築的特徴

一柳陣屋門は入母屋造り2階建て、1階は門の通路と詰所、2階は2室に分かれており、建築面積はわずか10坪ほどの小さな門です。見たところ材料は良質の檜が主体で、それとかなり目込みの良いものが使われています。

江戸時代には度重なる倭約令で豪商であっても檜はあまり使えなかったようですが、大名には適用されなかったのでしょうか。この建物は松山城築城に用いられたのと同じ慶長尺（1間6尺5寸）で建てられており、江戸初期の建物とみて間違いなさそうです。ただし文化財登録に向けた修理では、調査と施工の予算が十分になかったのか、かなり現代的手法をもってなされています。特に外部の腰板と瓦の納まりには、時代考証を無視して強引に進めた感を禁じえません。腰板であれば皆折釘や鋲釘が使われそうところですが、ステンレスの丸頭釘で打ち付けてあります。瓦は本瓦風の丸平一体瓦で、寸法が大きすぎて建物の規模に合っていない。また袖瓦は江戸初期にはなかった瓦で、もう少し工夫できたのではとも思います。予算の都合で仕方なかったのかもしれませんが、気になります。江戸初期の門とのことで、もしかすると板葺きや栩葺き、それか厳格な本瓦葺きだったかもしれません。その場合葺甲の納まりはどうだったのでしょうか。葺甲なしで千枚だったかもしれません。いずれにしてもロマンがありますよね。よかったら訪れてみてください。



▲ R 8. 9. 20 撮影

令和8年一級建築士試験「設計製図の試験」対策『ホテル』実例見学会報告

青年委員会 委員長 大内 雄志

開催日：令和8年9月5日(土) 13:00～14:30

開催場所：ホテルグランフォーレ（四国中央市）

参加者：設計製図試験受験生（9名）

四国中央支部スタッフ、青年委員会

協力：ホテルグランフォーレ

9月5日に、令和8年一級建築士試験「設計製図の試験」対策実例見学会が開催されました。本年も昨年に引き続き、四国中央支部と青年委員会の共同開催として実施いたしました。

今年の試験課題は「ホテル」です。留意事項には、「敷地の周辺環境や既存建築物の現状保存に配慮して計画すること」が示されており、単なる新築計画としてではなく、既存建物をいかに読み取り、周辺環境と調和させながら新たな計画に落とし込むかという、より実務に近い視点が求められる内容であると考えられます。

そこで今回は、ホテルグランフォーレ様のご厚意により、普段は立ち入ることのできない館内を特別に見学させていただきました。同施設は、既存の宿泊棟を残したまま隣接地に宴会場・レストランを増築しており、既存建物を活かしながら新たな機能を加える計画がなされています。まさに今年の課題テーマを、実際の建物を通して体感できる機会となりました。



▲座学講習の様子

また、宴会場やレストランをはじめ、バックヤードを含む諸室の配置、厨房と客席との関係、既存棟との接続方法などについても、実際に歩きながら確認することができました。普段イメージしているホテル計画と、既存建物を前提とした実例とを照らし合わせることで、図面上の知識だけでは得られない空間のスケール感や、動線

が実際にどのように使われているかを体感できたのではないかと思います。

実際の建築物を自分の目で見てイメージできたこと、確かめることができたことは、実務にも試験にも大いに活きるものだと思われました。近年、設計製図試験は難化傾向にあると聞きますが、参加された受験生の皆様が、今回得た気づきを合格への力の一つとしていただけることを願っております。



▲増築部分の接続部説明



▲ボイラー機械室の見学

そして来年は、今回参加してくれた皆さんが全員合格を果たし、今度はスタッフとして、これから受験する後輩たちにアドバイスをしてくれる立場になっていただけたことが、私たちにとって何よりうれしいことです。この見学会が、そのような形で世代を超えて受け継がれていく場となることを期待しております。

最後になりましたが、今回の見学会は、企画段階から会場との調整に至るまで、その多くを四国中央支部の皆様にご段取りいただいたことで実現しました。見学の貴重な機会を快くご提供いただきましたホテルグランフォーレの皆様、講師としてご協力いただきました高橋様、そして開催にあたり終始温かくお力添えをいただきました四国中央支部長ならびに支部メンバーの皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

第35回 全国女性建築士 連絡協議会(東京)参加報告

委員会報告

4

女性委員会 副委員長 八束 智恵美

開催日：令和8年7月19日(日)～20日(月・祝)
場 所：日本建築学会 建築会館 (会場参加)
参加者：4名

「未来へつなぐ『まち・ひと・建築』～対話から生まれるかたち～」をテーマに開催された、令和8年度第35回全国女性建築士連絡協議会に参加しました。

1日目は、全国女性委員長会議に田中委員長の代理として出席しました。「自己紹介カード」を用い、

●今の活動：仕事や地域プロジェクトなど、士会の枠を超えた活動

●教えて！：今気になっていること、知恵を借りたいこと

●目指す姿：10年後の理想の暮らしや働き方

●ジェンダー：業界の変わらない慣習、最近の気づきや未来への期待

をテーマにトークセッションを行いました。全国の女性建築士の仲間と、女性ならではのライフステージの変化に合わせた仕事との向き合い方について、さまざまな意見を交わすことができました。

その後の本会では、京都府・長野県の活動報告、宮城県の被災地報告に続き、SUEP.の末光弘和氏・末光陽子氏による「対話が紡ぐ環境デザイン」と題した基調講演が行われました。風や熱のシミュレーション技術を用い、自然と共生する建築デザインの手法についてのお話で、地域の環境や資源を読み解き、自然エネルギーを活用する設計方法は、大変興味深い内容でした。

2日目は、A分科会「建築と経営・不動産のあいだ」に参加しました。創造系不動産の高橋寿太郎氏をコメンテーターに迎え、設計者に求められる「不動産思考」や職能の拡張について、高橋氏のさまざまな経歴と経験を踏まえた視点からお話を伺いました。建築設計だけにとどまらず、不動産や経営の視点を持つことの重要性について考える機会となりました。

私自身、今回の全建女は子育てがようやくひと段落するタイミングで、約10年ぶりの参加となりました。久しぶりの参加でしたが、全国の女性建築士の皆さんとの交流や、新しい視点・知識を得ることができ、とても有意義な2日間となりました。



▲会場風景

仕事や暮らし、地域との関わり方を改めて考えるきっかけにもなる、大変得るものの多い会です。ぜひ多くの方に参加していただきたいと思います。

女性委員会 委員 大塚 美由紀

4年ぶりに現地で参加しました。当初、今年もZOOM視聴を考えていましたが、案内書の「お子様連れの参加も可能です」の一文に惹かれ、夏休みに入った小学生の姪を連れて参加しました。

久しぶりに他県の建築士さんにお会いしたり、会場のざわめきを感じたりする事はZOOMでは味わえない良さだと思います。

基調講演のSUEP.の末光夫妻各々の発想や着眼点はとても興味深いものでした。環境シミュレーション技術を駆使したデザインは未来的でありながら、自然と調和する建物として地域に溶け込むものになっていると感じました。

B分科会では岩手士会の取り組み「ダンボールハウスワークショップ」と中学校での出前授業「パズルで住まいを考えよう」の活動報告を聞きました。ダンボールハウスは子供向けのワークショップで、梱包用の巻きダンボールを立てた物にドアや窓を作ったり、内部を好きなように装飾したり、自分だけの自由な空間を作っていきます。模型とは違う「原寸大の空間体験」が魅力的で、終わった後に丸めて持って帰れるので家でも邪魔にならずにいいですね。

中学校での出前授業では「住まいの学習」として、4～6人のグループで暮らす住まいの計画をしました。各個室、水回りは一か所、皆が集まれる部屋等の設計条件の基で考えてもらいました。事前に用意した部屋や家具、自動車、植栽等のカードをパズルのように組み合わせて作り上げていくとグループごとにユニークな住まいが完成したようです。生徒が自分自身の事だけではなく一緒に暮らす人との関りを考える良い機会になったのではないかと報告がありました。

どちらの活動も今後の参考にしたい取り組みだと感じました。



▲ダンボールハウス



▲グループで暮らす家

木のジャングルジム「くむんだー」 &木組みのおはなし会

今治支部 青年委員長 今井 このみ

イベント名：くむんだー&木組みのおはなし会

開催日：令和8年7月4日(土)

対象：小学生と保護者

参加人数：27名(スタッフ含む)

会場：今治市大西公民館3F研修室

明専寺 鐘楼門

共催：くむんだーえひめ

令和8年7月4日(土)に、木のジャングルジム「くむんだー」&木組みのおはなし会と題して今治市内の小学生と保護者を対象にイベントを開催しました。これは一昨年から今治支部青年委員会で始めた伝統構法の魅力を伝えるイベントの第三弾で、2024年に開催した瓦のおはなし会、2025年に開催した土壁のおはなし会&野菜蔵づくりワークショップに続き、今年のテーマは木組みの魅力を伝えることでした。

木のジャングルジム「くむんだー」は、日本の伝統的な木造建築に使われる柱と貫に楔を打ち込んで組み立てる木育玩具です。子どもたちは、柱に貫を通し、木槌で楔を打ち込むことでジャングルジムの組み立て、組み立て終わったら解く体験をします。一本一本は細くても、組み立てると大人が乗っても大丈夫なジャングルジムが出来上がります。木組みの強さ、木の質感や感触を実際に体験するイベントです。



▲くむんだー組み立ての様子

また「くむんだー」は国産材で作られていて、ふるさとの山を守ることの大切さを伝える紙芝居とセットになっています。山や森を守ることは、水を守り、土砂崩れなどの災害を防ぐことにつながります。私たちがどのように山の木と向き合うかは、社会全体にとってとても大切なことだと知る機会になればと思っています。



▲山のおはなしの様子



▲くむんだー完成！

くむんだーの組み立て&解体体験の後は、同じ大西町内の明専寺へ。明専寺の鐘楼門は築186年の登録有形文化財で、令和7年から8年にかけて今治支部の白石さんが改修工事をしていました。そのご縁で今回のおはなし会の題材となりました。



▲明専寺鐘楼門



▲木組みのレクチャー

あいにくの雨により鐘楼門をじっくり眺めるのは難しかったのですが、鐘楼門の下で白石さんが木組みの実物模型を使ってレクチャーを始めると、子どもたちは「どうやって組み立てるのかな?」「どうやって外すのかな??」と大盛り上がりでした。また、先程くむんだーで体験した貫と楔の実物が鐘楼門でも使われているのを間近で見ることができました。その後は講堂に入って、スライドを見ながら鐘楼門の過ごしてきた186年と改修工事についてのおはなし会をさせていただきました。



▲鐘楼門のおはなし会



▲集合写真

木組みを含めた伝統構法の大きな強みは、圧倒的な耐久性!その実物である築186年の鐘楼門のお話を通して、子どもたちにその魅力を伝えられたらと思っています。ご参加いただいた子どもたちと保護者の皆様、ご協力いただいた「くむんだーえひめ」様及び今治支部メンバーに心よりお礼申し上げます。

建築士の日の事業 「模型家づくり体験」

支部報告

5

松山支部 青年・女性委員会 片岡 晶子

開催日：令和8年8月29日(土)

開催場所：浮穴公民館

対象：地域の小学生と保護者

参加者：小学生22名、保護者10名

松山工業高校生10名、引率1名

松山聖陵高校生10名、引率2名

建築士会員12名

松山支部青年・女性委員会では、建築士の日の事業として小学生を対象とした「模型家づくり体験」を2017年から開催しています。今年は夏休み終盤の開催となり、子供たちにとって最後の思い出作りになったのではないのでしょうか。



▲小学生と高校生の記念撮影

作業時間は約2時間。限られた時間内で子供たちが作りやすいよう家の形はシンプルに、事前にカットしたパーツを組み立てる作業から始まります。1時間ほどで家の組み立てが終わり、家や外構の飾り付けに移行します。このあたりから子供たちの個性が出てきます。芝や樹木、自然の砂や砂利、ビーズやシールなど、いろいろな材料を準備し、それらを存分に活用してくれました。自分で絵の具を準備して海と砂浜を描く子もいて、とても印象に残っています。私たちの想像を超えて子供たちの自由な発想にはいつも驚かされます。



▲高校生にご協力いただいた模型のカット作業▲

また、今回初めての取り組みとして、松山工業高校・松山聖陵高校の建築科の生徒の皆さんとタッグを組み、準備作業からお手伝いいただきました。昨年は少数精鋭の会員で模型を(夜な夜な…)約20セットカットしましたが、今年は高校生のお力を借りて短い時間でできたと聞いております。



▲高校生と建築士会員の共同アシスト

イベント当日も小学生にとって難しい作業や、悩んでいる子供たちのアシストをしていただきました。子供たちも年の近いお兄さん・お姉さんとお話ししながら楽しく作業できたと思います。そのおかげもあってか、例年よりも飾り付けにかけられる時間が増え、家や外構もレベルアップしていたようにも感じます。



▲個性あふれる家ができました

この模型家づくり体験に参加してくれた子供たちがもののづくりの楽しさや家づくりの魅力に触れ、少しでも建築に興味を持ってもらえたら嬉しいです。また、ご協力いただいた高校生の皆さんにも建築士会を知ってもらえるいい機会になったと思います。将来、建築士会の仲間になってくれる日を私たちも楽しみに待っています。

最後になりましたが、ご参加いただいた松山支部の皆様、そして温かくご協力くださった浮穴公民館の皆様、本当にありがとうございました。皆様のおかげで成功に終わりました。来年も引き続き開催予定です。皆で活動を盛り上げられたらと思っています。ご興味のある会員の皆様のご参加をお待ちしております。

八幡浜支部活動報告(令和8年度)

八幡浜支部 支部長 藤川 広治

1. 八幡浜支部理事会(第1回)

＜日 時＞令和8年4月23日(木)

＜会 場＞文化活動センター

＜参加者＞八幡浜支部理事 12名

2. 八幡浜支部総会

＜日 時＞令和8年5月23日(土)

＜会 場＞浜味館 あたご

＜参加者＞14名出席(正会員11名、賛助会員3名)

3. 令和8年度(公社)愛媛県建築士会通常総会

＜日 時＞令和8年6月15日(月)

＜会 場＞県民文化会館

＜参加者＞出席者2名

4. 八幡浜支部臨時理事会(事務局交代に伴う)

＜日 時＞令和8年7月3日(金)

＜会 場＞みなと交流館

＜参加者＞12名出席

5. 「建築士の日」の行事

＜日 時＞令和8年8月1日(土)

＜会 場＞新町商店街内

＜参加者＞5名出席

＜内 容＞アーテックブロック

建築クイズ

ロゴ入りうちわ配り

無料住宅相談会

6. 令和8年度第68回建築士会全国大会(ぐんま大会)

＜日 時＞令和8年10月16日(金)

＜会 場＞群馬県

＜参加者＞出席者なし

7. 八幡浜支部理事会(第2回)

＜日 時＞(未定)

＜会 場＞(未定)

＜参加者＞八幡浜支部理事

建築士の日の行事報告 「明石寺建物見学と史跡・大寶寺道探索」

西予支部 支部長 松山 清
報告 渡辺 建文

開催日時：令和8年8月2日(日) 13:30～17:00
参加者：会員11名・一般9名(内4名学生)

西予支部では、登録有形文化財である明石寺の7棟伽藍(建物)と工作物及び、大寶寺道の内、国指定史跡である755mの探索と、重要伝統的建造物保存地区の散策を行いました。

猛暑の“真っ只中”ですが、行事期間が7～9月なら、「出来れば夏休み中が良い、又日陰もあるだろう」との判断でこの日に決定しました。

ところが、あちこち連絡をしても、愛媛新聞の地方広告欄に募集を掲載しても、応募はありませんでした。

それでも何とか、会員を含め20名の参加になりました。中には、“興味”があるとのことで、中学生も参加してくれました。



▲ 開始の挨拶

ではなく快適にさえ感じました。(私的な意見ですが…)

住職和尚様の説明・案内が、心地良い話し方だった事がそう感じた要因にも思えます。参加者の皆さまを和ませていただきました。…さすがです。



▲ 住職和尚様の説明

さて当日、無情にも真っ青な“晴天”になりました。この日、宇和町では38.8℃を記録したようでした。

…それでも…、境内は、程好く木陰や涼風もあり、心配したほど

国登録有形文化財「明石寺」は、2025年1月号に紹介してありますが、間違い箇所もあるようです。

少し休憩して、いよいよ伊予遍路道:大寶寺道の探索(ウォーキング)に向かいます。遍路道1,400kmの内、3番目に長い遍路道が、大寶寺道(約75km)です。この内755m



▲ さあ、出発だあ！

夏の森林浴を味わいながら歩くことができました。

暑さも考慮して早めの休憩“夕食会”も考えていましたが、一般参加者の希望で、保存地区「中町」の散策も行いました。



▲ 小皆の後を追う 松山支部長

たまたまHM講座で行った「末光家住宅」の特別観覧日だったようで、久々の行事参加の宮本氏の説明のもと、楽しく見学出来たようでした。

一般参加者の話では、「初めての経験で、すごく良かった。」との事でした。

いよいよ、この「猛暑日の中の行事」の仕上げとして“夕食会”になりました。夕食会場は、本来は定休日との事でしたが、特別に開けていただきました。ありがとうございます。

確かに弱小支部における“このような行事”は、家族行事になりがちですが、“慰労会”をもって、家族間の親睦



▲ 皆さん、お疲れ様でした

が、国史跡に指定されており、ここを歩きます。

さすがに若い子は、歩くのが早いですが…年寄には、そこそこキツイ山道です。それでも、木陰の中の参道です。さわやかな山の空気に包まれ、真

になり、なにより行事参加の意義が出るように思います。暑い中それなりに“楽しい行事”が出来たと思います。

あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集しています。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。
(尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承ください。)

「いしづち」の次号の原稿締切日

令和9年 1月号(174号) 令和8年11月26日(木)

※1ページ写真込みで2150文字(25文字×43行×横2段)のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。

写真は1ページ当たり3枚程度まで題名を付けて添付してください。

また宜しければ投稿者の写真(免許写真程度の顔写真)を添付してください。

会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。

(尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかもしれませんので予めご了承ください。)

この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にも、建築についての対話等の輪が広がればと願っています。
情報・広報委員会

読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せください。お待ちしております。

「いしづち」編集委員会(士会事務局内) 宛 FAX 089-948-0061

編集後記

7月中旬、別府温泉や湯布院温泉に近い長湯温泉を訪れました。長湯温泉は、ほぼ全ての温泉が源泉かけ流しで、泉質の良さでも知られています。また、比較的ぬるめの湯が多く、熱い温泉が苦手な私でも、ゆっくりと長く湯を楽しむことができます。

私がここを訪れた目的の一つが、「ラムネ温泉館」です。設計は、建築史の研究者であり建築家でもある東京大学名誉教授の藤森照信氏。焼杉、漆喰、銅板を用いた外観は独特で、三角形の大きな屋根と、屋根の頂部から伸びる一本の松が強い印象を与えます。周囲の山や田園風景の中にありながら、決して周囲から浮くことなく、どこか牧歌的な雰囲気を感じさせます。

建物を近くで見ると、黒い焼杉の外壁と白い縦格子の対比、屋根に使われた銅板など、素材の組み合わせにも目を引かれます。さらに、建物の脇にある南伸坊氏による愛嬌のあるキャラクターまで含めて、この施設全体に遊び心が感じられます。

内部の浴場も藤森氏らしさがあり、直線的な外観とは対照的に、曲線を多用した空間となっています。露天風呂では炭酸泉に身体を浸すと細かな泡に包まれ、長湯温泉の泉質の魅力を目で見て感じるすることができます。

長湯温泉の魅力である泉質は、目には見えません。しかし、その温泉の魅力を建物の形や素材、空間のつくりによって訪れる人に伝えているのが、この「ラムネ温泉館」なのだと思います。

建築は、雨風をしのぐだけの器ではなく、その場所の魅力や価値を伝える役割も持っている。そんなことを改めて感じた訪問となりました。



〈いしづち〉2026/11

令和8年11月発行

発行人 会長 花岡直樹

発行所 公益社団法人 愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町四丁目1-5 愛媛県建築士会館2F

TEL(089)945-6100 FAX(089)948-0061 <http://www.ehime-shikai.com>

印刷所 アマノ印刷有限会社

情報・広報委員会・広報委員

委員長/大平 将司 副委員長/渡邊 道彦

編集委員/一之瀬 佳緒理 河合 優志 西岡 亜有美 西森 勉